

## 質的研究論文執筆の一般技法 —— 関心相関的構成法

西條剛央 国立精神・神経センター精神保健研究所  
Takeo Saijo National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry

### 要約

本論文の目的は、構造構成的質的心理学の方法論的拡張を行うことにより、質的アプローチにおける恣意性問題を解消する質的研究構成の一般技法を提案することであった。第一に、恣意性問題について簡単に解説された。第二に、それを解決するための概念が提起された。第三にそれは質的研究の論文を書くための技術へと拡張され、その研究モデルが提示された。最後に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチと比較する形で、本稿で提起された技法の意義が確認された。

### キーワード

構造構成主義, 構造構成的質的研究法, 関心相関的構成法, 恣意性, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

### Title

**A Writing Skill in Qualitative Research: "Interest-Correlative Construction Technique"**

### Abstract

The purpose of this paper is to propose a writing skill in qualitative research that could be used to solve the problem of arbitrariness by methodological extension of structure-construction qualitative psychology. First, we briefly review the arbitrary problem. Second, we propose a concept to solve problem. Third, we apply the concept to writing skills and formulate it as a research model in qualitative research. Finally, we examine the significance of this skill by contrasting it with the modified grounded theory approach.

### Key words

structural-constructivism, structure-construction qualitative method, interest-correlative construction skill, arbitrariness, modified grounded theory approach.

## 1 問題

近年、質的心理学の理論・方法論は徐々に整備されつつある（西條，2002；やまだ，1997，2002a，2002b）。中でも、「構造構成的質的心理学」（西條，2003，2004b）は、認識論的基盤から方法論、評価基準等に至るまで包括的に整備された質的心理学のグランドセオリーとして期待できる。なお、構造構成的質的心理学とは、やまだ（1997）の「モデル構成的現場心理学」を継承発展させたものである。そのため「心理学」を標榜しているが、その内実は心理学に限定されるものではなく、質的研究全般のメタ理論となりうることから、本稿では以下「構造構成的質的研究法」と表記することとする。

質的研究の今後の課題としては、松嶋（2004）が「従来、優れた研究は『研究者のセンス』といった、外的には観察不可能な要因によって説明されてきた」ことが「研究の公共化のためには障壁となる」と述べているように、職人芸的に実施されている段階を脱却するために、実行性・有効性・汎用性に優れた技法を整備することが挙げられる。

本稿では、質的研究に対して様々な局面で突き付けられる「恣意的である」といった批判を取り上げて、構造構成的質的研究法の技法的な拡張を行うことにより、その批判を解消する質的研究論文執筆のための一般技法を提案する。なお本稿のメタ理論となる構造構成的質的研究法やその認識論となる構造構成主義（西條，2005）については、適時説明を加えつつ論じることとする。

### 恣意性問題とは何か

木下（2003）は、「質的研究一般について指摘されることとして、論文を読んだり発表を聞いても、どうしてその結果が導かれたのかわからない、データから都合のよい部分を恣意的に選び抜いたのではないかと、あるいは典型例だけをつかっているのではないかと、あるいは、分析結果と相容れないデータ、例外となる部分は捨象したのではないか」という疑問や

批判が多く見られる」と指摘している。本稿では、様々な局面で突きつけられるこうした恣意性に関する批判のことを「恣意性問題」と呼ぶこととする。

本誌上でも、たとえば、やまだ（2002b）は、西條論文（2002）に対して「仮説に適合する都合のよい事例ばかりを恣意的に選択し、仮説に合致しない事例を無視しているのではないかと恣意性問題を指摘している。また、この批判を「事例選択の恣意性」から、「テキスト選択の恣意性」へと置き換えれば他の多くの本誌掲載論文にも該当するものとなる。こうしたことから、恣意性問題は質的研究全般に通底する難題であることがわかる。

そして、恣意的であるとの批判は、その研究が広い意味で科学的であろうとした場合に、その知見の信憑性を不当に下げることと直結しうる。なぜなら、研究が恣意的であるということは、その知見は捏造されたままではいかなくとも、通常は信用に値しないことを意味するからだ。なお、ここでいう「信憑性」とは、「たしかにそうである」という疑い難さとともに立ち現れてくる確信のことであり、構造構成主義では真実性ではなく、信憑性のある構造を追求する立場をとる（西條，2005）。

また、「質的研究は主観を是とするのだから恣意的であっても全く問題ない」といった意見もあろうが、主観を排除しないことと、知見を完全に恣意的に導き出すことは同義ではない。確かに質的研究には研究者の主観や解釈を活かすという側面があるが、それは知見を恣意的に、好き勝手に構成して良いという話ではないのだ。

### 先行研究からの学習困難性

そして、この問題を打開するために公刊された論文から学ぼうとしても、恣意性問題は依然として打開困難な形で残ったままとなる。なぜなら、通常論文においてはその技巧は隠された形になってしまっているからである。

優れた研究を優れたもの足らしめている構造はそれを見抜く眼力がなければ、それに気付くことすらできない。例えば、他人の書いた文章の誤字脱字は、我々に「読めない」「読みにくい」といった違和感をもた

らすため容易に気付くことができる。しかし、優良な文章は違和感を生じることなくスムーズに読めてしまうため、それを実現している職人芸的な技工は巧みに隠された形になってしまい、それを優れた文章足らしている構造を認識することは難しい。

特に、質的研究はスムーズに納得して読んでもらえるかどうか知見の信憑性（説得力）に大きく関わるため、その構造（技工）を知覚させないように構成されている。こうした理由から、後学者が質的研究の学習のため、ジャーナルに掲載されている事例研究を読んでも、恣意性問題を解消する卓越した技術は、隠された形となっているため、そこから有益な示唆を得ることができないのである。

これが恣意性問題を打開困難にしている構造の一端であり、質的研究の幅広い実施を妨げている一要因となっているといえよう。したがって、恣意性問題を研究者の努力不足に還元したり、後学者に「先行研究をたくさん読みなさい」とアドバイスすることは簡単だが、それだけでは必ずしも建設的な方向にはつながらない。質的研究がより公共性のある研究法となるためには、この問題を誰もが戦略的に解消するための視点（技法）が必要となるのである。

### 恣意性問題顕在化の必然的構造

次に質的研究で恣意性問題が生起する文脈を明らかにするために、まずはいわゆる「量的研究」では、なぜ恣意性問題が指摘されない（されにくい）のか若干の考察を加えることから始めてみよう。

少なくとも私は質的研究を行って「なぜそのようなアプローチを選択するのか」と選択理由を（批判的に）問われたことはあるが、量的研究を行って「なぜ量化するのか」と問われたことは一度もないし、また、そうした場面を見たこともない。もちろん、原理的には量的アプローチにも恣意性問題は入り込む余地があるのだが、量的研究の場合、広く普及していることもあり、そもそも現象を量化する理由も問われないといったように恣意性問題は看過されてきた側面はある。ただし、量的研究はその構造上、恣意性問題が入る余地が少ないのも確かである。なぜならひとたびそれが選択されてしまえば、そこから導き出される「平均

値」や「検定結果」は、基本的には「同じ結果」になることから、そこで呈示される「平均値」や「検定結果」が恣意的といわれることはないからである。

それでは、質的研究において恣意性問題が立ち現れるのはどういった場合なのだろうか。結論をいえば、それは事例研究における事例選択の際や、また典型事例として何らかのテキストが取り上げられる文脈において問題となる。文字制限内に論文としてまとめる際には、おのずと（それが明示的であれ非明示的であれ）事例を限定し、提示するテキストを膨大なテキスト群から厳選するという作業が不可欠となる。この選定作業時に、恣意性問題が混入してくるのである。言い換えれば、これは「その選定がいかなる根拠に基づいてなされたのか」という問題として立ち現れる。

通常我々は事例やテキスト等を選択する際に逐一理性的な判断を加えているわけではない。何らかの選択をする際には、その場の状況に応じて臨機応変に、より妥当と思われる方を直感的に選択することも多い。いわば、その選択は自らと相即している（隙間が無い）ため、我々は多くの場合、選択の理由を改めて問い直さない限り、選択の根拠を明示的に示すことはできない。つまり、個々の研究者は自分が重要だと思ったものを選択しているのだが、自分にとって重要であることは最初から自明であるため、どのような観点から重要だと判断したのかにまで思いを馳せることが難しいのである。そのため、恣意性問題におおいらず、この作業を進めるには特殊な視点が要求されるのである。

これは、データ収集から分析、構造を抽出するプロセスとはまた別に、論文を構成する過程で、独自の技術が必要であることを意味する。これが、質的研究が職人芸といわれる原因の一つということができ、論文執筆における技法が明示化されていないことは、質的研究の普及の大きな障壁となっているといっても過言ではあるまい。

従来、質的研究において、データ収集に焦点化された方法論的議論は数多くなされてきたが、それに対して、論文構成段階における技法の整備は大幅に遅れているように思われる。例えば、質的研究の優れた入門書として高い評価を受けているフリック（Flick, 1995/2002）の『質的研究入門』には、質的研究執筆

に1章が割かれ、「執筆の実践的機能」「執筆の正当化機能」「執筆の反省的機能」といったことについて述べられてはいるものの、やはり論文構成に有効な具体的な技法が提示されているとは言い難い。

以上のことから、恣意性問題は、質的研究を論文化する際の一般的な問題に他ならず、それを解消するためには、必要最低限の事例やテキストを必然性のある形で提示する必要がある。それを戦略的に実施するための技法が確立できれば、アプローチの如何を問わず、質的研究の後学者にとって有益なものとなると考えられる。

## 2 目的

本稿では、恣意性問題を打開するため、構造構成主義の中心概念の拡張を行い、新たな方法概念を提起することを第1の目的とする。第2には、さらにその方法概念を質的研究論文を構成するための一般技法へと拡張する。第3に、その研究モデルを提示することにより具体的な使用方法を例示した上で、既存の枠組みと対比しつつその有効性と射程を確認する。

## 3 「関心相関性」の拡張による「関心相関的抽出」

### 関心相関性とは何か？

まず構造構成的質的研究法（構造構成主義）の中核概念となる「関心相関性」について概説する。「関心相関性」とは、フッサール現象学（Husserl, 1954/1995）、竹田青嗣現象学（竹田, 2004）等の議論を経て定式化された「原理」である<sup>1)</sup>（西條, 2005）。それは、原理的に「意味・価値・存在」は、主体の「身体・欲望・関心・目的」と相関的に立ち現れるというものである（図1）。例えば、この観点からすると、通常は何の価値もないように思える「水たまり」も、生存に関わるほど喉が渇いていた場合、「飲料水」としての存在（意味・価値）として立ち現れることが明

示的になる。

そして、関心相関性は、自他の関心を可視化（対象化）するための認識装置として機能する。したがって、この関心相関的観点を研究領域に導入することにより、研究それ自体やその構成要素の価値や妥当性も、研究者の関心に応じて立ち現れるものであることを可視化することが可能となるのである（図2）。

### 関心相関的抽出への拡張

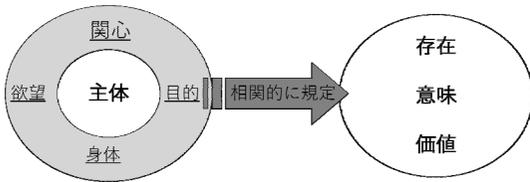
したがって、構造構成的質的研究法においては、理論、方法論、各種研究手法、事例、テキスト、解釈枠組み等、研究（論文）を構成する全ての要素が、関心相関的に選択されることになる。このように**研究者の関心や目的に照らし合わせて研究の構成要素を抽出（選択）していくことを『関心相関的抽出』**という方法概念として提起する。

なお、これを単一事例に当てはめて考えた場合、〈事例＝「構造」〉ではないことに注意する必要がある。そのように考えると「同義反復でしかない」という批判が成立してしまうからだ。それでは事例と構造はどのような関係にあるのか、事例の抽出を例に説明してみよう。

この問題を考える際には、やまだ（2003）の「データ」のレベルに関する議論が有益である。やまだは、データとは「立論の材料として集められた、なんらかの情報を内包している事実」のこととしている。そして、「比喩を使えば、ダイヤモンドがあるかもしれない『地層』と、ダイヤモンドが含まれる『原石』、そして磨いてダイヤモンドにした『宝石』とは、明らかにレベルの差があり、価値にも相違がある」という。

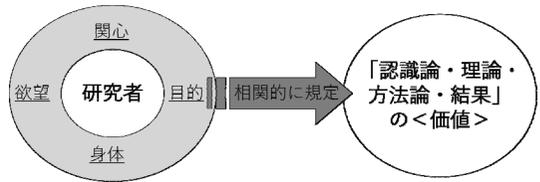
この比喩を「地層→フィールド」、「原石→事例」、「宝石→構造」と置き換えて考えてみよう。ある「構造」（宝石）に関心をもつ研究者が、理論的にその構造を抽出できる可能性のある「フィールド」（地層）を探り、さらには「事例」（原石）に当たりをつけ、検討した結果「構造」（宝石）が得られるということがある。このように構造と事例は異なる次元のものであり、同義反復ではないことがわかるだろう（図3）。

なお、構造構成主義においては、「構造」とは『同一性』と『同一性』の関係性とそれらの総体<sup>2)</sup>とい



「存在・意味・価値」は、主体の「身体・欲望・目的・関心」と相関的に規定されるという原理

図1 関心相関性  
(西條, 2005 を参考に作成)



研究を構成する認識論, 理論, 方法論, 結果の「価値」は、研究者の関心や研究目的と相関的に規定される

図2 関心相関的観点による研究営為の把握  
(西條, 2005 を参考に作成)

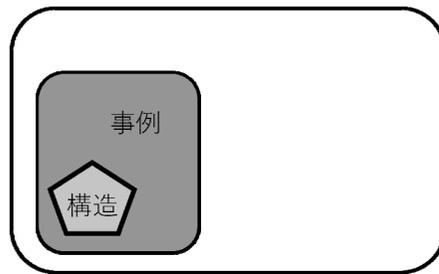


図3 関心相関的抽出における事例と構造の関係

うことができる。それゆえ、個々の具体的現象に対する「仮説」も、それらがより包括的なものとなった「理論」も、さらには「物語」も同じ「構造」として一元化することが可能となる(西條, 2003)。したがって、以下は、仮説も理論も、一括して「構造」と呼ぶこととする。

### 関心相関的抽出の具体例

この具体的な研究例としては、ダイナミックタッチにおける知覚の恒常性を、従来の精神物理学的(数量的アプローチ)と実験現象学(質的アプローチ)のト

ライアングレーションにより批判的に検討した研究(清水・西條・白神, 2005)が挙げられる。

ダイナミックタッチとは、「振る」ことにより、持っているモノの長さや形態を知覚する動的な「触知覚」のことである。この研究は、材質や長さの異なる棒の振りかたを変えた時に経験される感触の違いに焦点化し、従来の知覚の恒常性説の批判的検討を目的としたものであった。そのため、その目的と照らし合わせて、「内的視点からどのような感触が経験されるか」という観点から報告された事例を分析の対象とし、そうした側面が凝縮されているとみなせる箇所をテキストとして抽出して検討を加えた。

つまり、関心相関的抽出により研究目的に沿って事例やテキストの抽出を行い、またその選択理由を明示することで、恣意性問題を戦略的に解消したのである。

### 既存の枠組みと関心相関的抽出の異同

関心相関的抽出と類似した立場としては、フリック (Flick, 1995/2002) の主張が挙げられる。彼は、複数の質的研究法を比較することによって、理論的サンプリングの原則はもはや「質的研究の純粹かつ典型的な資料選択のやり方」であると主張している。すなわち、「サンプリング (抽出) の問題は研究プロセスのさまざまな段階で発生する」として、理論的サンプリングの考え方を、事例、資料、資料の中、資料提示といったように分析から論文執筆、プレゼンテーションに至る研究過程全般に拡張している。また、木下 (1999, 2003) の提唱する「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」(以下M-GTAとする) も関心相関的抽出と近い立場をとる。

上述したフリック (Flick, 1995/2002) や木下 (1999, 2003) の主張に対比させて、関心相関的抽出の特徴をいうならば、その抽出対象が認識論にまで及びつつも、相対主義に陥らない理論性を備えており、かつそれを「視点」として活用可能なように概念化した点にあるといえよう。

たしかに、認識論の選択に関して、木下 (1999) は、「それぞれが自分の判断で、立場を決めるべき」と主張し、最近でも「とくに強調したいのは自分の立場を意識的に選択するということである」と述べている。この認識論は各自の判断で意識的に選択すべきという指摘は、認識論的前提に無自覚であることに注意を促す意味で重要である。

しかし、木下は認識論の選択基準については言及していないことから、認識論は自分で勝手に (恣意的に) 決めていいかのような誤解を与える可能性があり、理論的には何でもありの相対主義との批判を回避することは難しい。それに対して構造構成的質的研究法では、認識論ですら、研究者の関心や目的と照らし合わせて、関心相関的に抽出されることから、相対主義に陥ることなく認識論を選択することが可能な「認識論的多元主義」として体系化されている。

#### 4 関心相関的抽出を方法論的視点とした「関心相関的構成法」

次に、この関心相関的抽出を援用して、論文作成に役立つ技法を提唱する。ここでは構造構成的質的研究法における全体的な研究過程について、「構造探索過程」と「論文作成過程」を明示的に分けて論じてゆく。

なお、ここでは「関心」と「目的」は意識的に使い分けていることに注意してもらいたい。研究開始時にも目的を立てるが、それはいわば「暫定的な目的」であり、程度の差こそあれ、その後得られた結果や進展により変更される可能性を持つものである。したがって、それは研究者の「関心」といったほうが適切なものといえよう。それに対してここでの「目的」とは構成された構造を踏まえて最終的に定められた「論文の目的」のことを意味する。

まず「構造探索過程」の基本的概観を示せば以下のようになる。第一に、研究者の関心と現象との相互作用の結果、[データ] が生み出される。第二に、研究者の関心とデータの相互作用の結果、[テキスト] が作成される。第三に、研究者の関心とテキストの相互作用の結果、つまりテキスト分析の結果、[構造] (仮説・知見) が得られる。

ここまでの構造探索過程を明示化すれば、1. 〈関心 → [データ] ← 現象〉、2. 〈関心 → [テキスト] ← データ〉、3. 〈関心 → [構造] ← テキスト〉となる。

そして、実際に研究を論理的整合性の高いものにし、恣意性問題を解消するためには、非明示的ながら、さらなる手続きが採られていることに警戒を要する。その手続きとは、研究者の関心と構造との相互作用の結果、最終的な [目的] を設定し、論文を、その目的と構造により二重拘束的に構成するというものである。この論文作成過程を明示化すれば、4. 〈関心 → [目的] ← 構造〉と最終的な目的を設定した上で、「5. 〈目的 → 論文 ← 構造〉」となる。この「→」「←」の間に、関心相関的抽出という視点を戦略的に組み込むことによって、恣意性問題を解消しつつ、質的研究を構成することができるのである。

先述したように探索的に構造を構成してきた段階では、自らの関心と構造化が相即しているため、その選択基準の明示化が徹底できず、恣意的な印象を与える記述になることが多い。そのため、関心相関的抽出を「視点」とすることにより、自らの関心を対象化した上で、研究論文を再構成するのである。

このように関心相関的抽出を「方法論的な視点」として論文を構成することを『関心相関的構成法』として提唱する(図4)。すなわち、『関心相関的構成法』とは研究者の関心に基づき探索的に構成されてきた構造(仮説・視点)を踏まえ、そこから逆算的に目的を設定し、関心相関的抽出を方法論的な視点として論文を構成することということになる。これにより論文の構成要素の選択に必然性を与えることが可能となり、恣意性問題を戦略的に打開することが可能になるのである。

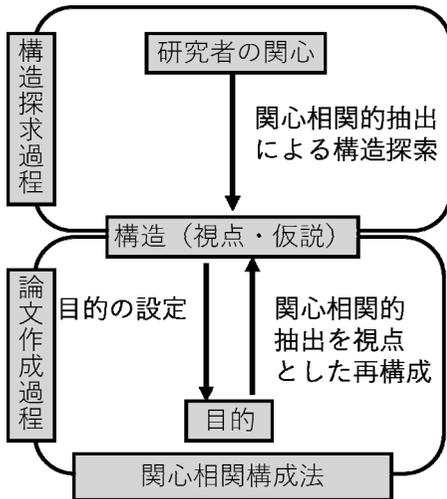


図4 「構造探求」と関心相関的構成法による「論文作成」の2段階研究プロセス

### 関心相関的構成法の具体的な使用法

抽象的な説明のみではわかりにくいと思われるので、

関心相関的抽出の具体的な使用法を説明してみる。フィールドワーク等では臨機応変さを求められるため、調査を進めるプロセスにおいて、「とっさに決める」ということは多々ある。

例えば、ふとした瞬間に「研究対象の周囲の人にも、聞けることは聞いておいた方がいいかもしれない」と考えついて周囲の人にインタビューしつつメモを取り始めるということや、フィールドとなっていた施設で開催されたイベントの時に、施設の責任者の方がビデオカメラによる撮影を申し出てくれたため、ビデオカメラを借りてビデオを撮った場合などがそれに当たるだろう。こうした場合、研究者は研究手法の選択根拠を十分に意識化することなく、「こうしたほうがよさそうだ」といった程度の直観的判断でデータ収集を進めていることも多い。

そのため、論文にはなぜその方法を採用したか記述しなかったり、あるいは「重要だと思ったためメモを取った」といったトートロジーの域を出ない弱い根拠付けによる記述に終止してしまうことは少なくない。その時の実感(直観)レベルでは「重要だと思ったためメモを取った」のであろうが、研究論文としてまとめる時は、可能な限り「～の観点から重要だと思ったためメモを取った」とそれを学問的な視点から捉えなおす必要があるのである。

したがって、上記のような状況を、関心相関的構成法により論文化した場合「現象を立体的に捉えるためにトライアングレーションを採用し、可能な状況においては、周囲の人にもインタビューを行い、またイベント時には責任者の許可を得てビデオカメラによる撮影も行った」というような記述になるであろう。

すなわち、データ収集の現場では直観的に判断されることも多いのだが、論文を再構成する段階では、可能な限り学問的な観点からその判断の根拠に名前を付け、系統的かつ簡潔に示す必要があるのである。そして、関心相関的構成法はその再構成を可能とする枠組み(認識装置)なのである。

なお、このように研究者の関心が論文構成に関わることを明示化するのは、科学的研究としては客観性を損なうので相応しくないと考える人もいるかもしれない。しかし、構造構成主義(西條, 2004a, 2004b, 2005)では、研究により導き出された構造は、そのアプロー

チの如何を問わず、人間が構成したものであるという原理的な立場をとる。したがって、構造構成主義では、関心を隠蔽するのではなく、関心を可能な限り明示化（可視化）することによって科学性を保証することになる。

実際に研究者が構成しているにもかかわらず、純粹で客観的な構造を提起したふりをすることは、科学的で公平な態度とはいえないだろう。その意味では、再構成を明示的に宣言した上で、論文を構成する関心相関的構成法はより公正な方法といえることができるだろう。なぜなら、従来の質的研究は、程度の差こそあれ、こうした再構成の作業を経ているにもかかわらず、それは論文に明示化されず、研究プロセスが不透明になっていたためである<sup>3)</sup>。

## 5 関心相関的構成のモデル提示

さらに、後学者の学習を容易にしておくために、関心相関的構成法の観点から、小倉論文（2003）をその典型例に位置付けてモデル提示を試みる。なお、これは小倉論文が関心相関的構成法に基づき構成されたと主張するものではない。そうではなく、関心相関的構成法の典型例を呈示するという「関心」から、小倉論文という「テキスト」を解釈したものといえよう。なお、小倉論文を取り上げた理由は、『質的心理学研究』の1・2号の全論文を検討したところ、その中で最も首尾一貫した必然的構造を備えた論文構成になっていたことによる<sup>4)</sup>。

以下、小倉論文の章立てが精妙に構成されていることから、この章立て（表1）を基軸に、上記の観点からこの論文を秀逸足らしめている構造（表2）を取り出し、それを中心に説明を加えていきたい。

表2は、「(A)『抽出対象』は、(B)という『抽出根拠』に拠り、具体的に (C) という『内容』を選択した」というように読む。以下の表2の解説は、抽出根拠となる部分は下線部、抽出対象は太字、実際に選定された内容は二重下線を加筆する形で説明を加えた。

(1.1) といった数字は、小倉論文（2003）内の記載部分を指す（表1参照）。

(1.1) まず〈再帰的近代としての高齢化〉という歴史的社会的状況の中で、人間存在と社会との関わり<sup>1)</sup>の在り方が質的に変わろうとしており、そのような背景にともない「高齢化社会における新たな人間形成の存在論的基盤の構想と生成が問われている」ことを確認している。

そして、「本研究は、以上のような歴史的社会的認識のもとで、高齢化社会における人間形成の新たな存在論的基盤を模索していくための方法論的・実践的試み」として課題を設定した。この課題こそが、この論文の基底を為す「関心」といって良いだろう。

(1.2) そしてこの「課題を設定するとき、その課題を追求していくための方法理性（メタ理論）も同時に問わなければならない」とし、「歴史的社会的状況に根拠づけられた方法理性」として意味解釈法、特に「生成的理論」（Gergen, 1994/1998）が相応しいことを論じていく。

(2.1) これを踏まえ、「〈視角〉を構成するとき、〈再帰的近代としての高齢化社会〉という現実的背景に呼応して理論的背景においても再帰性が増大している、という現状を考慮にいれなければならない」とし、それらを「人間形成観への問い」という主題として定めた。

そして「この『人間形成観への問い』を起点とする本研究の立場と課題認識を『視角』として定着するならば、つぎの4つの柱に総括される」とし、それら一群の視角を「ラディカル・エイジング」として提起した。

(2.2) さらに「では、〈ラディカル・エイジング〉の視角から『人間形成観への問い』を探求していくくうえでは、いかなる概念的構えで臨んでいけばよいのだろうか」と、論を進めていく。そして、生成的理論の立場から社会化概念を「加齢プロセスにおける自己再帰的な状況」と「社会の再編プロセスとを同時に包み込んだものとしてみていく構えが必要だろう」として、「このような認識的構えを表明する方法的概念として〈再帰的社会化〉概念」を採用した。

そしてそのような「社会化の在り方を模索していくためには、そのための新たなリアリティを、現実の社会生活における変化の『兆し』の中から感受していかなければならない」とし、「ここで着目すべきなのが

表1 小倉論文(2003)の章立て

1.	本研究の理論動機と認識目的——メタ理論的構図
1.1	歴史的社会的背景としての〈再帰的近代としての高齢化社会〉
1.2	「生成的理論」の構築というメタ理論的構図
2.	視角と方法——調査問題の構成
2.1	視角としての〈ラディカル・エイジング〉
2.2	生成的感受概念としての〈再帰的社会化〉と〈個人誌的アプローチ〉
2.3	調査問題
3.	フィールドの理論的選定と調査概要
3.1	現代日本における「中年の転機」
3.2	〈意味感覚としての隠居〉
3.3	調査概要
4.	現代中年のライフストーリー
4.1	Aさん
4.2	Bさん
4.3	Cさん
5.	解釈と考察
5.1	3つの文脈(まなざし)
5.2	「社会化」概念再考——人間形成の回生のために
6	おわりに

表2 小倉論文(2003)をテキストとして用いた関心相関的構成法のモデル

箇所	(A) 抽出対象	(B) 抽出根拠	(C) 抽出された内容
1.2	方法理性	課題(関心)	生成的理論(意味解釈法)
2.1	主題	理論的背景における再帰性の増大	人間形成観への問い
2.1	視角	課題×人間形成観への問い	ラディカルエイジング
2.2	方法的概念	ラディカルエイジング×人間形成観への問い	再帰的社会化
2.2	方法的構え	社会のあり方の探索	個人誌
2.3	調査問題	視角×方法	〈再帰的近代としての高齢化社会〉における人間形成の基盤は何か
3.1	社会集団	認識目的に応じた意味を担う対象の抽出	現代日本の中年世代
3.2	トピック・エリア	意味を担う対象抽出の手掛かり	意味感覚としての隠居
3.2	フィールド	上記の総括	中年世代×意味感覚としての隠居
3.3	事例	既存の意味体系(人間形成観)からの差異化	3名(A・B・Cさん)
3.3	構造	上述の枠組みによる検討	人間形成を回生させる3つの文脈のダイナミズム
3.3	調査問題への回答	構造がもたらす意味	意味の根源的基層へのまなざしから再帰的に生成される超越的地平が重要になる

〈個人誌〉にアプローチしていく方法」であるとして、方法的構えを定めた。

(2.3) 以上のような視角と方法（認識装置）を用い、「〈再帰的近代としての高齢化社会〉における人間形成の基盤は何なのか」という調査問題を構成した。

(3.1) そして「意味解釈法を方法理性とする生成理論の立場からすれば、探索といっても現実は無作為に参入していくわけにはいかない」と論じ、「〈ラディカル・エイジング〉の視角から、認識目的に応じて、意味を担った対象をとりださねばならない」と関心相関的な視点を堅持して論を展開していく。その結果「中年の『危機』から好機としての『転移』への分岐点にいる」「現代日本の中年世代」に対象とする社会集団を定めた。

(3.2) さらに「意味を担った対象をとりだしていくうえで手掛かりとなるトピック・エリア」として「〈意味感覚としての隠居〉」を挙げる。なぜならそれは、「〈再帰的近代としての高齢化社会〉という歴史的社会的状況の意味感覚でもあり、人生後半の意味地平への省察（reflection）を起点として人間形成の意味地平全体を問い直していく意味活動である」からだ。

そしてこれらを総括し「以上、現代日本における『中年の転機』と〈意味感覚としての隠居〉とが交差する地点が、意味を担った対象として、調査問題を探索していく場（フィールド）として選定」した。

(3.3) インタビュー協力者の9名の中から3名のライフストーリー（事例）を取り上げた。その選定基準に関しては「既存の意味体系（人間形成観）からの差異化を図っているライフストーリーを意図的に選択した」が、それは「『例外事情を選んで、その意味の存在完成を試みる意味解釈法』という方法理性の独自性」であると脚注で述べており、むしろ方法理性（メタ理論）との整合性の高さを示すものである。

上述してきた枠組みに基づき3名のライフストーリーを検討することにより、「自己（人間存在）と社会との関係を再帰的に捉え直し、人間形成を『再生』させる3つの文脈（まなざし）のダイナミズム」を提起した。これがこの研究によって得られた「構造」といえるであろう。さらに、「〈再帰的近代としての高齢化社会〉における新たな人間形成の存在論的基盤は何なのか」という、調査問題に対する回答として「〈意味

の根源的基層〉へのまなざしから再帰的に生成される〈超越的地平〉が、その重要な要素となる」ことを示した。これは構造のもたらす意味ということができるよう。

以上が小倉論文（2003）をテキストとして用いた関心相関的構成法のモデルとなる。逆に、関心相関的構成法の観点からして良くない論文とはどのようなものかを述べておこならば、それは事例やテキスト選択の理由が全く書かれていなかったり、「私が重要だと思ったものを取り上げる」といった恣意的な記述に終止しているものといえよう。

ただし、ここでは全ての論文が小倉論文のように徹頭徹尾、論理的必然性を備えた構造でなければならないと主張するものではない。このモデルは、関心相関的構成法が最もうまく機能した場合は、結果としてこのような構造になるということを示すために呈示したものと考えてもらいたい。

## 6 関心相関的構成の機能とその射程

### 関心相関性の限界

言うまでもないが、関心相関的構成法はいかなる研究をも質の高い論文に再構成する魔法でも万能薬でもない。データが貧弱で、研究者の関心や定めた研究目的との乖離が大きすぎるといったように、研究の内実が粗雑であれば手の施しようはない。

その意味では、やはりデータ収集の際に、関心相関的抽出や、理論的サンプリングに基づき、生成されつつある理論と照らし合わせて必要なデータを収集するといった方法をとることが有効であろう。また、目的とデータとが乖離しないように「問題設定、データ収集、データ分析、民族誌の執筆という四つの作業を同時進行的に進めていき、問題と仮説を徐々に構造化していくだけでなく、民族誌自体も次第に完成させていくアプローチ」である「漸次構造化法」（佐藤，2002）によって、ある程度体系的にデータを収集していくことも有効だろう。これらの方法は、データ収集

レベルで機能する方法といえる。

それに対して、関心相関的構成法は、研究構成レベルで内的整合性が取れていなかったり、論文構成レベルで恣意的な印象を与え、不当に知見の信憑性が低下してしまっている場合に有効性を発揮する技法となる。関心相関的構成法とは、構造（知見）の信憑性を不当に上げるための枠組みではなく、あくまでも現象との相互作用（観察・聞き取り）の結果として浮き彫りとなってきた構造（知見）の信憑性を不当に下げないために機能する枠組みに他ならない。

しかし、これは理論的サンプリングや漸次構造化法、関心相関的抽出といったデータ収集時に機能する枠組みと、関心相関的構成法のどちらのほうが優れているのか、という問題では決してない。それは料理をする際に、「包丁とコンロのどちらが優れているか」と問うのと同じぐらい意味のない問いといわねばならない。なぜなら、前者はデータ収集時に有効に機能するものであり、後者は論文構成時に有効に機能するといったように、そもそも機能する段階が異なるからだ。

関心相関的構成法は、異なるアプローチを否定するものではなく、論文の構成・執筆段階で質的研究者をサポートする技法といえよう。本稿では現状において後者が明らかに手薄のように思われたため、論文執筆の技法を体系化したのである。

### M-GTAとの類似性

次に木下（2003）の提唱するM-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）と対比させつつ関心相関的構成法の意義を確認しておく。ここでM-GTAを比較対象として抽出した理由は、M-GTAは現在の認識論から分析法、論文執筆に至るまで体系的かつ実践的にまとめられている優れた枠組みであり、関心相関的構成法と高い類似性がみられることによる。

まずM-GTAでは、「理論的飽和」と「方法論的限定」によって、研究の結果得られた理論（仮説）から逆算的に、理論的飽和が成立するように、方法論的に目的を限定するという戦略的立場をとることにより、理論（構造）と目的との関係を整合性のあるものにする。また、データの範囲に関しても、結果として理論的飽和が成立するように、「最終的に用いたデータに

ついて対象者数、対象者の条件、面接方法などデータの収集や処理（逐語化など）の仕方、倫理的配慮などを説明する」（木下、2003）ことにより方法論的に限定を行うことになる。さらに木下はM-GTAの分析方法を7点に要約して述べることによって、論文構成に直接役立つ方法を提供しているといえよう。このように論文構成を視野に入れた工夫をしている点で、M-GTAは関心相関的構成法と類似していることがわかるだろう。

### 視点（認識装置）としての機能

次にM-GTAと比較した上で、関心相関的構成法の第一の特長を挙げるならば、恣意性問題に陥らず論文を構成するために、1つの技法として概念化（定式化）したことといえよう。これに対して概念化だけでは意味がないという意見もあるが、方法論として用いようとする際に、「視点」となる「概念」があることは極めて重要なことといえる。

なぜなら、先述したように、選定の根拠を学問的観点から明記していくことは高度に知的な（人為的な）作業であり、それを選定のポイントごとに、論文に明記していくためには、その指針（視点）となる明確な概念装置が必要となるのである。この概念装置となるのが関心相関的抽出であり、関心相関的構成法なのだ。

### 「構造化に至る軌跡」の「質」の確保機能

構造構成主義（西條、2005）では、条件統制ではなく条件開示を徹底することにより、広義の科学性を担保する。そしてその構造化に至るまでの条件を開示することを「構造化に至る軌跡」と呼ぶ。

それでは構造化に至る軌跡を残すには、どれだけの条件を開示すれば良いのだろうか。論文化するときには逐一実際の舞台裏を含めてあらゆる出来事を書くという方法も考えられるが、それは原理的には不可能であり、また論文の文字数制限を考えても全く現実的ではないだろう。そうした方法は、冗長さにつながるだけでなく、場当たりの印象を与え、読み手を混乱させてしまう可能性も考えられる。

実は、先に示した関心相関的構成法のモデルとして

の小倉論文は、「構造化に至る軌跡」を残すという観点からも、極めて質の高いものになっている。これから、構造化に至る軌跡は詳細であればあるほど良いという類いのものではないということがわかるだろう。

結論をいえば、構造化に至る軌跡を残すには、研究の目的に照らし合わせつつ、選択肢が想定できるポイントや、構造化に大きく影響したと考えられるポイントごとに、記述すれば良いのである。つまり構造化に至る軌跡は、あくまでも関心相関的抽出を基軸に、ポイントを押さえていった結果、記述されたものである必要がある。そして、それによって、必要かつ十分な必然的構造を備えた論文にすることができるといえる。

「構造化に至る軌跡を残すこと」と「関心相関的構成法」は、「手段」と「目的」の関係にある。つまり、「関心相関的構成法」は「構造化に至る軌跡を残すという目的」を達成するために機能する枠組みなのである。これを関心相関的構成法の第二の特長として挙げることができる。

### 多様なアプローチに適用

関心相関的構成法の第三の特長として、多種多様なアプローチに適用可能なその汎用性を挙げることができる。上述したM-GTAにおける論文構成に関する工夫は、GTAの枠組みに特化したものであるためM-GTAの中でしか機能しないという制約がある。それに対して関心相関的構成法は全てのアプローチに適用可能である。

ただし、M-GTA（木下，2003）のこのような限界は、より妥当で柔軟なGTAの構築という関心から導き出される必然的な限界であり、それはM-GTAそれ自体の欠陥を意味するものではなく付言しておく。

### 偶発事例への適用

第四の特長として、関心相関的構成法は、論文作成時における「再構成」に焦点化された技法であることから、偶然得られた事例を説得的に示すために機能する点を挙げることができる。これは、質的研究は一般

に仮説生成を重視することが多いという意味でも重要なことである。なぜなら、偶然出会った一事例から、重要な仮説が生成されるということはフィールドや臨床現場ではいくらでもありえるからだ。

例えば、臨床の現場で、偶然受け持ったクライアントに、治療の最終段階で通常みられないような急激な変化がみられたため、その時点で初めて学問的に意義のある事例として認識されるということもあろう。あるいは、3名を対象にインタビューして、結果的に、その中の1名が学問的にも興味深い心理的構造を抽出できた場合に、その1名の構造に焦点化して、目的を設定し、当該領域に新たな視点をもたらす事例研究として構成することもありうる。

綿密な計画に基づく研究ももちろん重要だが、意味や価値が事後的に立ち現れることも多く、そうした事前の計画自体を受け付けられないケースが現実には多々あるのである。

関心相関的構成法は、こうした半ば偶発的に得られた知見であっても、質の高い研究論文として構成可能とする枠組みであることから、その意味では、現実的であり、質的研究の可能性を大幅に拡張する技法といえることができる。

### 単一事例への適用

第五に、上述した特長とも関連してくるが、単一事例を積極的に扱える点が挙げられよう。M-GTAはミニ版グラウンデッド・セオリーを推奨していることから、それを徹底すれば単一事例研究に行き着くはずなのだが、ミニ版とはいえども提起される構造が「理論」という名称をとるためか、単一事例の研究を積極的に認める立場はとっていない。

それに対して新たな視点（構造）のもたらす「意味」を重視する構造構成的質的研究法は、単一事例の研究を積極的に推奨する立場をとる。したがって関心相関的構成法は説得的な単一事例の構成に有効な枠組みとなりうるのである。

### 方法の目的化・信念対立解消機能

しかし、「なるほど、確かに関心相関的構成法は優

れた汎用性のある技法ではあるが、それゆえに数量的研究が、検定結果を示すアスタリスクに振り回されたように、初めに技法ありきとなり、その技法に振り回されてしまう危険性があるのではないか」という指摘もあろう。そのようにいつの間にか方法を遵守すること自体が目的になってしまい、現象理解を妨げることは「方法の自己目的化」と呼ばれる（西條，2005）。

木下（1999）はM-GTAの立場から、「手順の明示はグラウンデッド・セオリーを評価するときのひとつの要素」であるとして、手順の明示といった方法遵守が自己目的化しないように諫めている。これは適切な指摘といえるが、おそらくそうした指摘が「注意書き」的になされても、方法（手段）が一人歩きしはじめることを抑制するのは困難であろう。

なぜなら、ユーザーが注意書きには関心を払うとは限らず、むしろ関心相関的観点からすれば、通常は方法の有効性にばかり目が奪われることも少なくないといえるからだ。そして、その枠組みが優れたものであればあるほど、ユーザーにその方法が万能であるかのような幻想を与えてしまうため、方法の自己目的化が起こりやすいというパラドクスがある。統計や検定も優れた性能を有しているからこそ、方法の自己目的化が起こってしまったといえよう。

さらに言うならば、方法の自己目的化は、方法を絶対視する態度にもつながるため、異なるアプローチ間の信念対立を引き起こす契機になる。質的研究者の中でも、「自分がやっていることが質的研究なのであって、あなた（たち）のやっていることは質的研究ではない」といったように、自らが依拠するアプローチ（学派）を先験的に正しいものとして、異なる立場を否定する人は、学会等々でも散見される。それが集団化すれば、たとえばグラウンデッド・セオリー・アプローチにおける「ストラウス派VSコービン派」（木下，1999）に代表されるような、派閥的な信念対立に陥ることになる。

質的研究が盛んになってきたとはいえ、量的研究と比較すればまだまだマイノリティに過ぎず、その内部で小競り合いしているゆとりはないと私は思う。そして、このままでは、今後質的研究が盛んになればなるほど、各種アプローチを基軸とした学派間の不毛な信念対立に陥る危険性も危惧される。このように「方法

の自己目的化」は異なるアプローチ間の信念対立をも引き起こす契機となることから、方法が抱える最大の<sup>アポリア</sup>難問ともいえるのである。

それではこの難問を解消するためにはどのような条件を備えている必要があるのだろうか？ 結論をいえば、それはその「方法」が（1）優れた研究を生み出す「生産性」と、（2）方法の自己目的化を回避するといった二重の機能を、表裏として備えている必要がある。つまり、本来の目的を見失うことなく、方法は目的を達成するための手段でしかないことを常に認識させる機能を備えている必要があるのだ。

そして関心相関的構成法こそ、「生産性の質的向上」と「方法の自己目的化の回避」といった二重の機能を不分離な形で備えている、おそらくは現存する唯一の技法といえるのである。なぜなら、先述したように、その技法の基底を為す「関心相関性」とは、研究者の関心や研究目的を可視化するための認識装置だからだ。

関心相関的構成法は、この関心相関性を中軸に論文を構成する技法であることから、方法が目的を達成するための方法（手段）である限り、方法の妥当性は目的と相関的に規定されるといった、当たり前過ぎて失念しがちなことを再認識することが可能となるのである。

このように関心相関的構成法は、多くの汎用性の高い機能を備えていると同時に、「方法の自己目的化」を回避し、異なるアプローチ間の不毛な信念対立を回避できる認識機能を備えている点が、その最大の特長の1つということができよう。

## 7 まとめ

以上のように、関心相関的構成法は、アプローチを問わず、臨床現場やフィールドの現実に適した、しなやかな研究を可能とする論文構成の技法といえることができる。また方法の自己目的化の回避機能を備えていることから、いわば、効果が大きく、副作用が少ない技法といえよう。

関心相関的構成法に対して「こんな難しい枠組みを

整備しては、現場の研究者が使うことができず、高度な統計による数量的研究と同じ道を辿るのでないか」という意見を持つ人もいることだろう。しかし、もし難しいから数量的アプローチを避け、簡単だから質的アプローチを採用するというのであれば、それはあまりにも短絡的過ぎるといわざるを得ない<sup>5)</sup>。

やまだ (2003) のセリフを借りるならば、『質的研究』はリーダビリティが高い、つまり普通の日常語で書かれているので専門性が見えにくく、誰でもすぐ読め、すぐできそうで何でも許されるように見えるかもしれないが、一度論文化に至るまで質的研究を行ったことがある人ならそれが誤解に過ぎないことがわかるだろう。

質的研究は統計のような客観的とされる基準を持たないからこそ、内的整合性や論理的必然性を備えた研究として構成される必要があり、それには高度に戦略的な記述が求められるのである。それが、質的研究が「職人芸」であり、「アート」と言われてきた一因であることを理解しなければならぬ。そして質的研究が一過性の流行で終わるか否かは、この職人芸の段階をいかに脱却し、公共性のある「方法」になれるかに掛かっていると言っても過言ではないのである。

関心相関的構成法は、職人芸的に実行されていた<sup>アート</sup>技の構造を取り出し、<sup>テクニク</sup>技法化したものであるため、一度身に付ければその実行性、有効性、汎用性の高さを実感できるであろう<sup>6)</sup>。

## 注

- 1) ここで「関心相関性」の系譜について述べておく。ここでいう「関心相関性」の直接的起源とその基底を為す原理は、フッサール (Husserl, 1954/1995) が認識問題 (主観-客観問題) を解明するために、「経験対象と与えられ方との相関関係という普遍的なアプリアリ」として提起した「志向性」という概念にまで遡る。またそれを「身体・欲望・関心相関性」として展開しつつ、「関心相関性」という表記を用いている点は、竹田青嗣の議論 (竹田, 2004) を継承している。ここで重要なことは、竹田青嗣が現象学を信念対立解消のための「思考法」として提示する中で、関心相関性を用いている点といえよう。本稿の中心概念となる「関心相関性」は全ての世界存在に妥当する原理性を備えており、そうであるがゆえに、信念対立の解消を根本

モチーフとする「構造構成主義」の中核概念に据えられたのである。概念の系譜やその内実についての詳細は『構造構成主義とは何か』(西條, 2005) を参照してもらいたい。少なくともこの概念は信念対立の解消を根本動機として体系化された思想の中核概念であることを押さえておいてもらいたい。

- 2) ここでいう「同一性」とは、言葉 (単語) の中核的意味 (それが意味するそのコト) とでもいうべきものである。
- 3) 松嶋 (2004) は、研究プロセスを反省的に検討することにより、研究プロセスの透明性を高める提案をしている。
- 4) この小倉論文の選出自体、関心相関的抽出の実践的具体例に他ならない。
- 5) もっとも、関心相関的構成法は、一見すると複雑で難しく見えるかもしれないが、その原理は「関心相関性」という1つの概念によって貫かれており至ってシンプルである。この意味ではまさに“Simple is the best”という表現がふさわしい技法といえよう。
- 6) この技法を身に付けるためには、まず、様々な質的研究の関心相関的構成の視点を定めて、読み解いてみるという方法が考えられる。そして最も有効なのは、やはり関心相関的構成法を、実際に論文をまとめる時に使用してみることであろう。

## 引用文献

- Flick, U. (2002). 質的研究入門：〈人間科学〉のための方法論. (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子, 訳). 東京：春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Reinbek bei Hamburg : Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- Husserl, E. (1995). ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学. (細谷恒夫・木田元, 訳). 東京：中央公論新社. (Husserl, E. (1954). *Die krisi s der europaischen Wissenschaften und die transzendente Phenomenologie: Eine einleitung in die phanomenologische philosophie*. Haag : Martinus Nijhoff.)
- Gergen, K. J. (1998). もう一つの社会心理学：社会行動の転換に向けて. (杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀, 監訳). 京都：ナカニシヤ出版. (Gergen, K. J. (1994). *Toward transformation in social knowledge* (2nd ed.). New York: Springer Publishing Company.)
- 木下康仁. (1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生. 東京：弘文堂.
- 木下康仁. (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い. 東京：弘文堂.

- 松嶋秀明. (2004). 質的研究に、もっと研究プロセスの探究を. 発達心理学研究, 15, 243-245.
- 小倉康嗣. (2003). 再帰的近代としての高齢化社会と人間形成：〈意味感覚としての隠居〉をめぐる現代中年のライフストーリーから. 質的心理学研究, 2, 56-83.
- 西條剛央. (2002). 生死の境界と「自然・天気・季節」の語り：「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示. 質的心理学研究, 1, 55-69.
- 西條剛央. (2003). 「構造構成的質的心理学」の構築：モデル構成的現場心理学の発展的継承. 質的心理学研究, 2, 164-186.
- 西條剛央. (2004a). 母子間の抱きの人間科学的研究：ダイナミック・システムズ・アプローチの適用. 京都：北大路書房.
- 西條剛央. (2004b). 構造構成的質的心理学の理論的射程：やまだ (2002) と菅村 (2003) の提言を踏まえて. 質的心理学研究, 3, 173-179.
- 西條剛央. (2005). 構造構成主義とは何か. 京都：北大路書房.
- 佐藤郁哉. (2002). フィールドワークの技法：問いを育てる, 仮説をきたえる. 東京：新曜社.
- 清水武・西條剛央・白神敬介. (2005). ダイナミックタッチにおける知覚の恒常性：方法論としての精神物理学と実験現象学. 質的心理学研究, 4, 136-151.
- 竹田青嗣. (2004). 現象学は〈思考の原理〉である. 東京：筑摩書房.
- やまだようこ. (1997). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. やまだようこ (編), 現場心理学の発想 (pp.161-186). 東京：新曜社.
- やまだようこ. (2002a). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス：「この世とあの世」イメージ画の図象モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- やまだようこ. (2002b). なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか？：質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承的サイクル. 質的心理学研究, 1, 70-87.
- やまだようこ. (2003). 「実験心理学」と「質的心理学」の相互理解のために：菅村論文へのコメント. 質的心理学研究, 2, 159-163.

して有益な示唆を受けました。ここに記して心より感謝致します。

(2003.12.05 受稿, 2004.11.15 受理)

## 付 記

松嶋秀明氏には論文構成等に関して有益な示唆を頂きました。また富山大学の斎藤清二氏には、M-GTA に関連